The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	宇治一派の末流達 ： 宇治姓の人形遣いを中心に
Author(s)	川端, 咲子
Citation	待兼山論叢. 文学篇. 1999, 33, p. 1-13
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/47886
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

宇治一派の末流達

――宇治姓の人形遣いを中心に――

川端咲子

一　はじめに

本居宣長の『在京日記』には、彼が京都で見た芝居などの記事が度々出てくる。例えば宝暦七年十月一日には以下のような記事が記されている。

きのふは、清兵衛君とるいして、筑後か芝居見に行たり、初日にていとにきはし、狂言は津国女夫之池といふふるきを、室町千畳敷と名を改めてする也、大坂より大和かのほりて、けふよりかたるなれは、いとにきはゝし、道具立いと興あるさまにしなしたり、切りの段千畳敷にて、書院庭のたゝすまひ、いとひろううるはしうしかけたり、此段は人形出つかひにて、大和と長門太夫と出かたり、いと面白きこと也、此大和といふは、今あめのしたにならひなき浄琉理の上手也けり、（『本居宣長全集』第十六巻）

京都竹本座の繁栄している様はこの日記からありありと窺うことができる。一方、かつて京都で繁栄した宇治一派の最後の消息も又、この『在京日記』から知ることができる。宝暦六年六月十日の日記によれば、嘉太夫浄瑠璃、豊松大和太夫の弟子豊松縫殿を座敷に呼んでその浄瑠璃を聴いたという。その浄瑠璃に対する彼の感想は「大方嘉太夫ふしは、今の世にさのみもてはやさす、女童の耳とをきやうなれと、義太夫よりは、又一きは味はひありて、おもしろきかたある物也」というものであった。「今の世にさのみもてはやさす」。これが、宝暦当時の宇治一派の有様であった。宝永八年の加賀掾の死後、その余勢を以てかろうじて京の地で勢力を保っていた宇治一派のその後の去就を追ってみたい。

二　宇治一派の衰退

守屋毅氏が指摘された享保頃よりの京都劇壇の不振と同じ事が、宇治一派の衰退にも指摘できることは拙稿においてすでに述べた。[1] さらに、度々起こった火災は物質的な面でも打撃を与え、宇治一派の衰退への道に一層の拍車を掛けたことは想像に難くない。『月堂見聞集』だけでも、享保年間に四条周辺で享保八年五月二日、同九年五月十日、同十五年二月十五日と三度大規模な火災があったことを知ることができる。ことに九年と十五年の火災では大和大路常磐町の芝居小屋が焼けてしまっている。元文五年には初代加賀掾が浄瑠璃を上演したかつての宇治座であり、それ以後嘉太夫の名代所持者に受け継がれ、宇治一派ことに富松薩摩の拠点となった大和大路常磐町の芝居小屋を手放さざるを得ない状況にまでなる。[2] さらに芝居小屋を手放したのみならず、その浄瑠璃そのものも『竹豊故事』（宝暦三年）に「当時は此流を語る人もなく絶果てたる同前、残念の至り」と評されるまでになってしまう。

そして、明和元年、『公事方壁書』「宮芝居名前帳」の宇治嘉太夫の項の朱書によれば、嘉太夫の名代そのものも五条橋下平居町桝屋助十郎という者に譲り渡す事になるのである。この桝屋助十郎以後、「宇治嘉太夫」という名は、太夫や人形遣いとしてではなく名代としてのみ残ることになる。ちなみに、名代としての「宇治嘉太夫」は明治まで存続し、主に四条道場寺内芝居の名代として番付に名前を残している。

ところで、かつて京都の主な名代はその大方が宇治一派に占められるという状況にあった。[3] しかし、その名代を所持していた宇治一派の太夫たちはほとんど皆、その二代目以後「宇治嘉太夫」と同様太夫としてではなく名代としてのみ残ったようである。例えば、天理図書館に所蔵されている『酒呑童子枕言葉』の裏表紙に竹本姓の太夫が名を連ね、名代として「富松薩摩」座本として「山本次郎三郎」の名がある零葉を見ることができる。この「富松薩摩」はおそらく加賀掾の弟子である初代富松薩摩ではなく、享保十五年九月二十七日に名代を譲られた二代目富松薩摩であろう。二代目富松薩摩については、享保十五年に名代が譲られた事以外になんら資料がないが、この零葉から推して、太夫としてではなく名代所持者として存在していたようである。加賀掾の弟子として富松薩摩と並ぶのが野田若狭である。この野田若狭の名代は、『歌舞伎事始』に「享保七寅年九月廿六日、右伊太夫より又弟竹本彦太夫譲り受、竹本若狭といへり。夫より延享三年忰音松へ譲、御免ありて、竹本若狭と成。」とあることから、野田若狭からその弟の竹本彦太夫へと譲られていたことがわかる。竹本彦太夫とは、その「竹本」という姓からも判るように、宇治一派ではなく竹本座の太夫の一人である。つまり「若狭」という名代は宇治一派から竹本系へと移動したことになる。この現象は、同じ京都の「土佐」という名代の移り変わりを思い出させる。「土佐」とは延宝期に宇治加賀掾と並び賞された京都の太夫山本角太夫の受領号であった。しかし、角太夫没後その名代は所持し

ていた角太夫の息子源助を経て、正徳五年十二月に源助の従弟で宇治一派の一人である宇治外記へと譲られた。正徳期、「土佐」という名代は衰退しつつある角太夫系から当時隆盛であった宇治一派へと移った。そして享保になり、今度は「若狭」という名代が衰退しつつある宇治一派から隆盛の竹本系へと移ったのである。名代が宇治から竹本へ移ったことが確認できるのはこの「若狭」の事例のみである。しかし、この「若狭」の名代の移動と同様の動き――竹本座への吸収――を実は人形遣いの中にも見ることができるのである。

三　宇治座の人形遣い

寛文の比、江戸ニ小平太と云人形遣ひの名人有。（中略）近世にハ辰松八郎兵衛名誉を顕ハされたり。京都にハ貞享元禄の比、おやま五郎兵衛。同五郎右衛門・大蔵善右衛門。正徳享保の比、三升平四郎・宇治久五郎・三十郎・与八郎等何れも名を得し上手の遣ひ手也。大坂にハ辰松氏・藤井小三郎・桐竹三右衛門等のおやまの名人有し也。当時立役人形吉田文三郎は古今無双の名人也。相次て若竹東工郎誉れ高し。おやまハ今藤井氏、男人形には桐竹・吉田・豊松・若竹氏の中に上手分多し。（『日本庶民文化史料集成』第七巻所収『竹豊故事』）

まず最初に宇治座・宇治一派と人形遣いとの関係を押さえておきたい。右は『竹豊故事』の「操人形之故事 並名人之遣手 付古今達人之事」である。「京都にハ」と貞享元禄の名人として名が挙がっている人形遣いはすべて、宇治座に所属していた人形遣いである。そして、正徳貞享の「上手の遣ひ手」もまた宇治一派に関わりのある人形遣いなのである。

最初に出てくる三升平四郎は、絵尽『玉黒髪七人化粧』の中に人形を遣っている姿が描かれている。絵尽『玉黒髪七人化粧』は元文三年の序文が付されており、絵尽に描かれている太夫は豊松大和太夫等の享保末から活躍した宇治一派の太夫である。絵尽本文中に「まさ姫のしよしやごと三升平四郎でづかい大出来〳〵古今の大あたり〳〵」と書かれており、三升平四郎が『玉黒髪七人化粧』の見せ場である「まさ姫」の七変化を遣っていることが判る。この三升平四郎は享保から元文にかけて宇治一派の中心的人形遣いであった。

続く三人は、宇治姓であることから宇治一派に関わりの深い人形遣いと断定してよいだろう。中でも宇治久五郎・三十郎の二人は、加賀掾や宇治嘉太夫に縁のある名前である。嘉太夫の名代の所持者の内、初代である加賀掾は確かに太夫であった。二代嘉太夫も太夫として絵入本の脇題箋に名が残っている。しかし三代嘉太夫である宇治久五郎は、宇治座の人形遣い徳田源八の子であり、人形遣いであったという推定が信多純一氏によってなされている。④『竹豊故事』に出てくる「正徳享保の比」の「上手の遣ひ手」の一人宇治久五郎はこの三代嘉太夫である。宇治久五郎事三代目宇治嘉太夫が死去した後、享保十一年に嘉太夫の名代を受け継いだのは宇治一門の一人初代の宇治三十郎である。この四代目嘉太夫も宇治久五郎と同じく人形遣いであった。『竹豊故事』に宇治久五郎に続いて名が挙がっている三十郎というのは、この初代宇治三十郎のことであろう。五代目宇治嘉太夫は元文五年に名代を継承する。『歌舞伎事始』にはこの名代継承の事が書かれているが、そこには「右山十郎より元文五申年今の嘉太夫譲り請けたり」とあり、「今の嘉太夫」という所に「人形つかひ上手也。宇治山十郎事」という割り注が付いている。ちなみに、この宇治三十郎の名も絵尽『玉黒髪七人化粧』に見える。

『竹豊故事』にある通り、加賀掾生存中の宇治座には名高い人形遣いが多く所属していた。そして、加賀掾没後

「宇治座」というまとまりが崩壊した後も、宇治一派には名人上手と呼ばれる有力な人形遣いが多くいたことも『竹豊故事』や絵尽から窺えるのである。

四　京都竹本座の人形遣い――宇治姓の人形遣い

『義太夫年表』を調べると宝暦以後「宇治」を姓とする人形遣いが複数人いたことが確かめられる。『義太夫年表』に出てくる、つまり現存番付から知れる宇治姓の人形遣いは宇治久五郎（宝暦十二年頃から明和七年まで）宇治山十郎（宝暦六年）宇治十五郎[5]（宝暦四年から天明二年まで）宇治五郎四郎（宝暦四年から宝暦十一年まで）宇治清次郎（宝暦十二年から安永元年まで）宇治岩五郎（明和七年から天明五年まで）宇治才次郎（明和二年・京都）宇治斎蔵（明和七年・京都）宇治光五郎（安永二年・伊勢古市）宇治大次郎（安永五年・京都）宇治瀬治郎（天明頃に二度・京都）宇治清八（寛政二年・京都）の十二人である。三章で挙げた『竹豊故事』には正徳享保のころの「上手の遣ひ手」として宇治三十郎・久五郎以外にもう一人宇治与八郎の名を挙げている。絵尽『玉黒髪七人化粧』にも先に挙げた三升平四郎・宇治三十郎と並んで宇治定五郎という名の人形遣いが描かれている。彼らの存在から正徳享保頃の宇治一派には「嘉太夫」と縁のある宇治久五郎・宇治三十郎以外にも「宇治」を姓とする人形遣いがいたことが判る。正徳以後「宇治」を姓とする人形遣いの一団が京都にいた。彼らはみな宇治座及び宇治一派に関わりが深かった。以上のことから宝暦以後の番付に出てくる宇治姓の人形遣い達も、宇治一派に関わりがあると考えられる。

宝暦以降の番付に見える宇治姓の人形遣いの中で、宇治三十郎・宇治久五郎は、三章で触れた通り「嘉太夫」ゆ

かりの人形遣いの名である。宝暦六年二月京都竹本座上演の『壇浦兜軍記』で娘「しら梅」を遣っている宇治三十郎は、二代目宇治三十郎が宇治嘉太夫を継承した後に三十郎の名を継いだ三代目の宇治三十郎であろうか。『竹豊故事』に出てくる宇治久五郎は享保十一年に没しているので、宝暦十二年頃から姿を現す宇治久五郎はその三代嘉太夫である宇治久五郎とは別人である。ただし、同じく久五郎という名を名乗っていることからして、『竹豊故事』の宇治久五郎に縁のある人形遣いと考えてよい。宇治三十郎・宇治久五郎が名前を載せるのは京都竹本座の番付のみである。彼ら「嘉太夫」ゆかりの人形遣いが竹本座の人形遣いとして宝暦以後の京都竹本座の番付に名を載せているという事実は、同時期に宇治一派の太夫達がほとんど姿を消していたという事と相俟って注目すべき事である。

番付にもっとも多く名が出る宇治姓の人形遣いは宇治十五郎である。宝暦四年からほぼ定期的に番付にその名が載っている。この宇治十五郎については、宇治三十郎・久五郎と違い、宇治一派の一員であると示すことのできる現存資料はない。しかし、まず「宇治」という姓であること、「十五」郎という名から宇治三十郎に関係のある人形遣いであることが想像できることから宇治一派の人形遣いだったと考えてよいのではないか。このことは、彼が遣った人形の役々からも窺える。「表一」は宝暦以後の番付から宇治十五郎のみを取り出したものである。(6) 興行のあった年月日と座、興行のあった土地、演目と宇治十五郎が勤めた役名を纏めてある。初出は宝暦四年正月『愛護稚名歌勝閧』の「高しなたん正」と「しらすか六郎」である。翌宝暦五年の正月には『仮名手本忠臣蔵』の桃井若江之介と斧九太夫を遣っている。宝暦七年正月の『国性爺合戦』では李到天・老一官を、宝暦十三年正月の『奥州安達原』では安部宗任・外ヶ浜南兵衛と、初出の宝暦四年以来端役ではない役を遣っているのである。また、明和元年・二年・九年には頭取も勤めている。彼の名は宝暦四年以前の番付には全く見えないが、彼が遣う人形の役か

表一

年月日	座	場所	演目	役
宝暦四年正月十五日	竹本座	京	「愛護稚名歌勝関」	高しなたん正、しらすか六郎
宝暦五年正月十八日	竹本座	京	「仮名手本忠臣蔵」	桃井若江之介、斧九太夫
宝暦五年五月九日	竹本座	京	「芦屋道満大内鑑」	治部太夫
宝暦五年九月九日	竹本座	京	「新うすゆき物語」	しふ川藤馬
宝暦六年二月一日	竹本座	京	「壇浦兜軍記」	岩永衛門
宝暦六年四月十七日	竹本座	京	「本朝三国志」	加藤虎之介
宝暦六年六月二十五日	竹本座	京	「ひらかな盛衰記」 「傾城反魂香」 「わん久恋物狂」 「双蝶々曲輪日記」	梶原平蔵 亭主伝三 おさん おてる
宝暦六年七月十六日	竹本座	京	「小野道風青柳硯」	左大将早なり、てつへき大蔵
宝暦六年十月二日	竹本座	京	「男作五雁金」	鶴木もんど、布袋市右衛門
宝暦六年閏十一月四日	竹本座	京	「小栗判官車街道」	子かねまつ、横山二郎
宝暦七年正月十九日	竹本座	京	「国性爺合戦」	李到天、老一官
宝暦七年七月十五日	竹本座	京	「夏祭浪花鑑」	舅義平治
宝暦七年十月朔日	竹本座	京	「室町千畳舗」	海上太郎、白菊
宝暦八年二月五日	竹本座	京	「行平磯馴松」	高松右衛門、たいのはた大部
宝暦八年七月十五日	竹本座	京	「大内裏大友真鳥」	大友真鳥
宝暦八年九月十八日	竹本座	京	「蛭小島武勇問答」	伊藤次郎、宇佐美平治
宝暦九年十月十二日	竹本座	京	「太平記菊水之巻」	もろやす、かちぞう
宝暦十二年正月二十日	竹本座	京	「昔男春日野小町」	大筆熊四郎、春日のぜんじ
宝暦十二年三月二十一日	竹本座	京	「花系図都鑑」	大谷一藤、ぜゝ兵衛
宝暦十二年六月十五日	竹本座	京	「忠臣蔵七ツ目」 「信州川中島」 「反魂香　問の山の段」	平右衛門 てるとら 名古屋山三
宝暦十二年七月十五日	竹本座	京	「古戦場鐘懸松」	ときただ、にしきど太郎、どす兵衛
宝暦十二～十三年三月	竹本座	京	「日高川入相花王」	四十治、がいじやく僧都
宝暦十三年正月八日	竹本座	京	「奥州安達原」	外ヶ浜南兵衛、安部宗任
宝暦九～十一年正月	竹本座	京	「楠昔噺」	白川のゐん、六弥太 徳太夫

宝暦十一年五月以降 宝暦十三年十一月以前	竹本座	京	「由良湊千軒長者」	大江の時かど、由良三郎
明和元年正月十七日	蛭子屋吉兵衛座	京	「傾城阿古屋の松」	佐々木源蔵
明和元年五月二十八日	竹本座	大坂	「京羽二重娘気質」	角兵衛、（頭取）
明和元年七月十五日	竹本座	京	「敵討稚物語」	新左衛門、（頭取）
明和元年十月二十日	竹本座	京	「小野道風青柳硯」	はやなり、たつ木仁介、（頭取）
明和元年十二月朔日	竹本座	京	「西行」 「双蝶々」 「うすゆき」 「芦屋道満」	西行法師 与治兵衛 正宗 源太 （頭取）
明和二年十月朔日	竹本座	京	「姻袖鏡」	吉ッ川金藤太
明和三年十二月四日	竹本座	京	「太平記忠臣講釈」	斧九太夫、やさま喜内、天川屋義平
明和四年五月十四日	竹本座	京	「源平二張弓」	なんばの次郎、まち兵衛、がん兵衛、やつこうん平
明和四年六月二十一日	竹本座	京	「夏楓浮名紅」	わしの喜兵衛
明和四年九月九日	竹本座	京	「咲分赤間関」	佐藤庄司、弁慶
明和四年十月四日	竹本座	京	「男作五雁金」	本庄曽平次、げんりう
明和五年三月中旬	井筒屋権右衛門座	伊勢	「三日太平記」	森蘭丸、くわせき大臣
明和七年正月十日	扇谷和歌太夫座	京	「忠孝大磯通」	鬼王
明和七年二月十九日	扇谷和歌太夫座	京	「近江源氏先陣館」	四斗兵衛、北条時政
明和七年閏六月二十三日	扇谷和歌太夫座	京	「仮名手本忠臣蔵」	高師直、加古川本蔵、義平
明和七年八月十一日	扇谷和歌太夫座	京	「小田館双生日記」	奴伴内、暗がりの牛蔵、ばんの太郎左衛門
明和九年三月十日	亀谷座	京	「太平記忠臣講釈」 「新うす雪物語」	矢さま喜内 伊賀ノ守（頭取）
安永七年四月二十三日		名古屋	「苅萱桑門筑紫轢」 「ふたつ腹帯」	新洞左衛門 伊左衛門
天明二年	豊竹生駒太夫座	大坂	「紙屋治兵衛」 「ひらかな盛衰記」	江戸屋太兵衛 梶原源太

らして、宝暦四年以前に人形遣いとして活躍していなかったとは考えにくい。むしろそれ以前からすでに人形遣いとしての実績はあげていたものと考える方が妥当である。その人形遣いとしての活躍の場は竹本座ではなく京都の宇治一派の中であったため、番付等に名前が残っていないのではないだろうか。

宇治十五郎の載る番付からは、大きな特徴を見いだすことができる。それは、彼が竹本座のみに出演しているという点である。[7] しかもその竹本座は宇治三十郎・久五郎同様に「京都の竹本座」にほぼ限定されている（表一参照）。宝暦四年の京都竹本座創設から明和四年までの間に京都竹本座に出勤した人形遣いは、百人を越える。彼らの多くは大坂の竹本座と京都竹本座の両方に出勤しているため、数年の周期で京都竹本座の番付に姿を現したり消したりしている。宇治十五郎同様、京都竹本座創設以来ほぼ常に京都竹本座に出勤している人形遣いとして、浅田勘十郎・笠井庫十郎・桐竹源十郎・柚竹与八・森竹藤四郎・山本甚六・吉田才治等を挙げることができる。しかし、彼らとても京都竹本座のみに出勤していたわけではない。浅田勘十郎・笠井庫十郎は宝暦六年頃から共に京都竹本座の頭取を勤めている。前者は京都竹本座創設以前は大坂の豊竹座や竹本座に出勤しており、後者は京都竹本座創設以後も、宝暦十三年・明和元年には大坂の竹本座に出勤している。桐竹源十郎は、京都竹本座創設以前及び宝暦五・六年に大坂の竹本座に出勤している。宝暦五年の番付から頭取を勤めている吉田才治もまた、京都竹本座創設以前及び明暦元年から四年の間大坂の竹本座に出勤している。残りの三人（柚竹与八・森竹藤四郎・山本甚六）は宇治十五郎同様に宝暦五年の番付から突然姿を現した人形遣いである。現存の番付類を見る限り、柚竹与八が宝暦十三年二月に一度だけ大坂の竹本座に出勤しているが、それ以外は京都竹本座のみに出勤している。ただし、柚竹与八が明和元年から三年まで、森竹藤四郎が明和元年以降、山本甚六が明和三年・四年に京都竹本座の番付の中に

出てこない時期がある。それぞれ二年、三年の間姿を見せないのだから、この間彼らが大坂の竹本座に出勤していた可能性はある。もちろん、毎回京都竹本座の番付に名前を載せるわけではないけれども、京都竹本座以外には姿をあらわさない人形遣いというのも存在している。[8] しかし、全体の割合としては、京都竹本座のみに出勤している人形遣いより、京都へも大坂へも出勤している人形遣いの方が遥かに多い。そうした中、宇治十五郎は宝暦五年以後ほぼ毎回京都竹本座に出勤しており、大坂の竹本座には出勤していないのである。宇治十五郎のように主役級の人形をも遣える人形遣いの中では、これは特異なことではないだろうか。しかも、この宝暦四年から明和四年までの間京都竹本座のみに出勤ということは、先に挙げた宇治姓の人形遣い達全てに当てはまることなのである。

このような宇治十五郎及びその他の宇治姓の人形遣い――殊に「嘉太夫」ゆかりの宇治三十郎・久五郎――の動きから次のようなことが考えられる。宇治一派の浄瑠璃は宝暦頃ほとんど姿を消してしまっていた。僅かに残った太夫達は、本居宣長の『在京日記』にあるように座敷に呼ばれて浄瑠璃を語る「座敷浄瑠璃」になってしまっていた可能性が高い。「座敷浄瑠璃」化した宇治一派の中には人形遣いの居所はない。もともと人形遣いは太夫と違い、宇治系と竹本系で殊更に使い方が異なるはずもなく、居場所の無くなった宇治一派の人形遣いが、当時京都へ進出し定着・繁栄しようとしていた京都の竹本座へと大挙して移動したとしてもおかしくはない。二章で述べたとおり宇治一派が衰退し始めた享保に「若狭」という名代は竹本座系の太夫へと移動した。そして今度は、人形遣いたちがこぞって竹本座へと吸収されていった。しかもそれは、「京都」という限定付きの竹本座への吸収であった。その開設に伴う問題と合わせると、[9] 宇治一派の人形遣いを受け容れた京都竹本座の方にも宇治一派の人形遣いをそのまま集団で受け容れる素地があったのではないかと考えられる。とすれば、「衰退して絶え果てたる同前」の宇治

一派の勢力の内、少なくとも人形遣いのみは衰退したのではなく「京都の竹本座」に残ったと積極的に評価できるのである。そして明和以降に現れる宇治姓の人形遣いは、宝暦四年に竹本座へ移動した人形遣いではなく、京都竹本座の中で新たに作られた「人形遣い宇治一派」の中で生まれた人形遣いであるといえよう。

五　おわりに

以上、宇治一派の太夫達の消息が途絶えた宝暦以後、京都竹本座にいた宇治一派の末裔と考えられる宇治姓の人形遣いについて考察してきた。彼らを受け容れた京都竹本座の実態等まだまだ考察の余地はあるものの、一旦ここで止めることとする。竹本座の問題については、今後の課題としたい。

最後に明和四年の竹本座退転後について簡単に触れておく。宇治十五郎は京都の扇谷和歌太夫座・伊勢の古市・大坂稲荷の豊竹生駒座などに出ていたらしい。天明二年の豊竹生駒太夫座への出演を最後に宇治十五郎の名は消える。安永頃、宇治岩五郎等は大坂・名古屋・伊勢などの興行に参加していたらしい。宇治姓の人形遣いの中で一番最後に記録に出るのは、寛政二年正月四条北側東芝居に出ている宇治清八の名前である。これを最後に、名代としての「宇治嘉太夫」を除くと宇治一派の消息は全く無くなってしまう。

注

（1）「加賀掾没後の宇治一派」（『演劇研究会会報』第24号）

（2）『荻野家文書』に「常盤町宇治賀賀（マヽ）掾儀、芝居屋舗書入レ家質銀借請候処、元利弐拾壱貫目相滞候ニ付、芝居屋舗町

中え引取、銀子相弁可申旨、元文五申五月十九日、於東御番所木村勝右衛門殿被仰渡候ニ付、町中引取銀子上納致候。」という記事がある。

（3）信多純一氏「京都に於ける宇治加賀掾」（『近世文芸』創刊号）

（4）注（3）

（5）番付によっては「宇治重五郎」と書かれているものもある。

（6）京都竹本座創設は宝暦三年とされているが、番付が残っていない。そのため、ここでは宝暦四年からを対象とする。

（7）明和元年五月の大坂竹本座への出演と明和五年の伊勢での興行、安永七年の名古屋での興行、天明二年の大坂稲荷の豊竹生駒太夫の芝居への出演の四回のみが例外である。この内、明和元年の大坂竹本座への出演は『外題年鑑』明和本に「京都新作尤京座中大坂へ引相勤」とあることから京都の竹本座が一座で大坂に移っての興行であり、「京都の竹本座」に準じると考えてよいだろう。

（8）宝暦四年の京都竹本座の番付に突然姿を現し、その時点ですでにそこそこの役の人形を遣い、京都竹本座にのみ出勤している人形遣いの中には、宇治姓の人形遣い以外のかつての宇治一派の人形遣いが他にもいるのかもしれない。

（9）『黄金時代の浄瑠璃とその後』（岩波講座　歌舞伎・文楽第九巻）第三部「竹本座・豊竹座の下降期」第一章「宝暦期の大坂と竹本座・竹田一族」において多治比郁夫氏は京都竹本座の開設について、それは竹本座からの独立を画策する吉田文三郎を懐柔するための二代出雲の手段であり、「竹本座という枠をはめた上で文三郎の独立興行の意志を叶えたのである。」とされている。当初の目的としては、大坂の竹本座の出店であって尚かつ竹本座からは独立しているという性格が京都竹本座にはあったのではないか。それゆえに、宇治一派の人形遣いを取り込む下地があったのだと考える事ができる。

（大学院後期課程学生）